

【学校づくり (小学校) 分科会基調】

塩崎義明

1. お国のための「脅育」(きょういく) 政策の中で苦しむ教師たち

教材研究ができないほど忙しい。

忙しくて、「授業」する時間がない？

忙しくて、『仕事』をする時間がない？？

私たちはいったい、何に振り回されているのだろう

そしてこれからまた、どんなことに振り回され、

どんなことで苦しむことになるんだろう？

日本の教育が、お国のための「脅育」(きょういく) になってしまった

そして、お国のための「脅育」ができない(しようとしない) 教師・学校は、

ダメ教員・ダメ学校として責任をとらなければならなくなった…。

やがて責任問題ばかりを気にするようになった学校現場。

責任問題を気にしすぎて逆に無責任になってはいないか？

責任問題を気にしすぎて自分の判断で動けない教師たち。

言ってしまうと責任が発生することを見通し、

独自のアイデアを出そうとせず、口を閉ざす教師たち。

そして……、そんな自分を責め続ける教師たち……

責任はすべて自分がとるから好きなようにやれ！

と言ってくれる先輩に会ってみたいと願う若者と

責任は自分がとりますから、好きなようにやらせてください！

と叫ぶ後輩に会ってみたいというベテランと

小さな勇気と大きな覚悟をもって、むきあってみませんか？

※「脅育」(きょういく) は塩崎の造語のつもりでいたら、すでに多くの場で利用されている言葉だと知りました。教育が教育でなくなっていることを多くの人が感じているということでしょう。

●多忙化は職場に相互不信を生み出す

教員評価制度をめぐる記事で、評価制度賛成の意見として、同じ職場の同僚教師が「忙しいのに定時に帰宅する教師に腹が立つ」と発言している記事を読んだことがある。この批判、批判の矛先が違うような気がする。定時に帰ることが悪いのではなくて、それが許されない職員集団の課題にこそ目を向けるべきだと思うのである。

少なくとも私のまわりでは……、たとえば家庭の事情で遅くまで学校にすることができない職員に対して批判などしない。それをカバーするようにまわりは動くし、定時に帰らなければならない職員も、それをどこかでカバーするように努力しているようだ。学校現場に限らず、一緒に働いて、そういうことではないだろうか。

定時に帰ることが批判されるような職場にしてはいけなし、そうなってしまっている原因についてみんなで考えるべきではないか。

しかし一方で多くの人があるような考え方（忙しいのに定時に帰ることはおかしい）になってしまっていることを知っておくべきである。残念な学校現場になってしまった。そしてそうさせてしまった教育政策に怒りを感じる。

●『三つのしめつけ』はうまくいかない！元氣出そうぜ！！

「脅育政策」を進めるにあたって、日本の教師は三つのしめつけを受けている。一つ目は、教員評価制度によるしめつけ。二つ目が、教育実践の自由を奪うしめつけ。そして三つ目が、行為行動の自由を奪うしめつけ。しかしこれはどれもうまくいっていないし、今後うまくいかないだろう。

一つ目の、教員評価制度については、上からの評価と子どもたちや保護者からの評価が一致しない…、むしろ上からの評価が低い教師ほど子どもたちや保護者に支持されていたりするといった現実の中で、教師に言うことをきかせようとしたねらいが、逆の結果になってしまっている。評価を給料に反映させたところで、そんなことにひるむ日本の教師ではなかったということ。

二つ目の教育実践の自由を奪うしめつけにしても、地域や子どもたちの実態を無視した上からの教育方法がうまくいくはずがない。しかたなく、“これはダメ”、“あれはダメ”とうしめつけを始めたが、そんなことをしていたら、学校は何もできなくなってしまう。つまりこのしめつけもうまくいっていない。逆に最近では、意欲ある日本の教師たちが次々と子どもたちの側にたった新しい授業を生み出していることに注目したい。

三つ目の行為行動の自由を奪うしめつけとは……、たとえば最近話題になった、国歌を歌っているかどうかを口の開き方でチェックするといったこと。しかし逆に言えば、口をあけて声さえ出していればよろしいでしょうか？ということ。これは思想信条の自由だとか、思想弾圧だとか、そんなレベルの問題ではなくて「職員室は右足から入らなければならない」（こんな話はありませんが）、「給食はパンから食べなくてはならない」（これはどこかの地域であるかも）といったレベルで行為行動を取り締まっただけ。もっと言えば、国旗・国歌の問題を、このレベルまで下げてしまったということ。これは、日の丸・君が代に対する冒とくではないかと、逆に心配してしまう。

2. 学校づくりの四つのスタンス

(スタンス 1) 過剰な気遣いに注意する

たとえば日本の学校は「気遣い集団」という顔も見せる。しかし、過剰な気遣いが、逆に相手や自分をおいつめることがある。つまり、孤立させないようにと思ってやったことが逆に相手を傷つけたり、孤立に追い込むこともあるということである。一人ひとりの「こだわり」を優先し、参加しないことの自由も保障しなければならないことにも注意したい。

(スタンス 2) 理不尽な困難は笑いとばす

日本の教育現場は「理不尽」だらけである。外国の記者が、「他の国の教師で日本の教師ほどがんばっている国はない。そして日本の教師ほど批判される国もない。それが理解できない」と疑問を持ったという話は有名。国際的には理解できないほど理不尽な世界で仕事をしていることを知っておくべきである。ゆえにそんな理不尽さとまじめに向き合うのではなく、時には笑いとばしてスルーすることも大切。すると逆に解決の見通しが見えてくることもあるということ。

(スタンス 3) 立場や世代を超えて、学ぶ姿勢を大切に

私の勤務校でも何年か前に、講師の職員や若い人たちに対して「〇〇さんを使って～」といった言い方が広がっていた。そこでそういった言い方や見方はやめようと提起し、その後なくなったのであるが今の日本の社会や風潮、文化の中で、どうしても若い人たちや立場が弱い人たちに向かって気づかずに間違えたスタンスをとってしまうことがある。立場や世代を超えて仲間から学ぶスタンスこそ共同の学校づくりのスタートラインであろう。

(スタンス 4) 『名物先生』が生きられる学校現場に

自分は『ダメ教員』でいいと思っている。"できる教師"になろうとした瞬間に子どもたちの思いとすれ違う危険性があるからである。教師にカリスマや名人は必要ない。子どもたちや保護者、そして同僚と一緒にあって、グタグタになりながら悩み、実践するスタンスこそ、子どもたちや保護者に支持されるスタンスである。教師に名人やカリスマはいらないけれど、一方で『名物先生』は必要である。ただ最近の学校現場は名物先生が生きられない現場になってしまった。教師一人ひとりの個性が発揮されるチームワークのあり方を追求するべきではないだろうか。歩調を合わせ、同じ方向を向くだけがチームワークではない。

3. 三つの入口

さて、この分科会で、学校づくりの入口を次の三つの視点で論議してほしいと考えている。

一つは、『子どもの指導を通して共同をつくりだす』ことについて。これは指導そのものについてはもちろん、そのことを通して、学校そのものを改革していくことの必然や意味、筋道について論議してほしいということである。二つ目は、『学びが学校づくりにどのように開かれていくのか』というテーマについてである。三つ目は、教師個々の生き方についてである。過剰な気遣いと「できる教師でいたい」という生き方（ある意味ごまかし方）に対置していく私たちの生き方について明らかにしていきたいと考えている

【学び・授業づくり分科会基調 ～一人ひとりの違いを保障する学習集団にチャレンジ！】

塩崎義明

1. いわゆる「授業」ができなくなった学校現場

多忙化としめつけで、授業の準備はもちろん、授業そのものができなくなりつつある学校現場。

～学校づくり（小学校）分科会基調参照～

指導書の解説本をなぞるだけならまだまし？プリントをやらせて、その間、別の仕事をしなければならぬ異常な現実。そんな中で、わからない子は切り捨てられ、「良い子」として生活できない子は問題児として扱われていく。

そして、繰り返し教師に押し付けられる「強制授業」（研究授業・研修授業のたぐい）。「強制授業」は、あくまでもお国のための「脅育」（きょういく）の方向。つまり、学習指導要領にそった教育内容や教育方法で進めることが強制される。教師個々のアイデアが生かされたり、目の前の子どもたちの実態や事情が考慮されることのない授業。そんな授業は、子どもたちの頭の上をむなしく、そして不愉快に通り過ぎるだけである。

この現状を打ち破る手がかりはないのだろうか？

私は、その手がかりを求めて、次の3つの視点に注目してみた。

- (1) 子どもたちが日常的な学習システムを持つこと
- (2) 教師が遊び心をもつこと（思いきった教材の選択と、発想の転換）
- (3) 教師が子どもたちと同じ呼吸が出来ること（応答関係を問う）

本分科会では、主に(1) 日常的な学習システムをもつこと。つまり、学習集団・学習班についてワークショップで体験的に学び意見を交換してみたい。

2. 意見の違いを保障し、一致でなく合意を目指す授業を

現状の打開する一つの手がかりは、子どもたちが日常的な学習システムを持つことであると考えてみた。そしてここで言う学習システムとは、いわゆる学習集団・学習班を利用した授業のこととする。

まず押さえておきたいのは、学習班は「助け合うこと」を目的として編成されるものではないということ。そういった側面も確かにあるとは思いますが、ここではその目的を『意見の違いを出すことを保障し、それを全体の前に引き出し、合意を目指す方向で討論していくための組織』として考えてみる。

【学習班を利用する】

[第一段階]

- 生活班と一致させた学習班
- リーダーは班長と一致している
 - ・班の二重討議を利用した授業がさかんに行われ、テーマについて仲間と話し合うことの訓練をしていく。
 - ・全員発表を目指して班対抗の発言競争などに取り組み、全体の前で発言する訓練をしていく。

[第二段階]

- 生活班を二つに分けて学習班とする。したがって人数は3～4名。
- 学習リーダーを班長とは別に選出。
 - ・教科ごとにリーダーが変わることも出てくる。
 - ・班会議でのメインテーマは、『どれだけ多様な意見（意見の違い）が出たのか』とする。つまりリーダーは意見の違いや多様性に価値をおいて話し合いを進めることになる。
 - ・全体での討論では、班の意見としてではなく、しだいに個人としての意見が述べられるようになる。
 - ・授業は、分裂した意見をどう合意していくのかを中心に置くが、合意が得られないことも良しとする。

[第三段階]

- テーマごとにその都度学習班が編成され、独自活動も行われる。また、教室の仲間だけでなく他の学級や学年、時には地域の人たちとも共に学習するケースも出てくる。授業時間を超えて、休み時間や放課後など、子どもたちが一つのテーマについて独自に活動していく段階である。

3. 具体的な実践を通して学び合おう（当日変更あるかも…、です）

(1) トレーニング：詩「むかついた」／班対抗川柳づくり

(2) サザエさんの授業（国語）

四コマ漫画を教材にして、楽しみながら仲間と話し合う。

学習班の中で話し合い、それをもとにして全体で討論するトレーニング。

(3) ケータイの授業（道徳）

仲間との違いを意識しつつ、自分の価値観をぶつけてみることに。

立場の違いごとに学習班を組んでみることにチャレンジ！